ニュー・イングランドへ（4）レキシントン・コンコードで　　2023.10.8.

9 月 21 日（木）に、独立戦争の舞台になったレキシントン・コンコードに出かけました。そこはボストンの北西 20 キロの町です。「一発の銃声が世界を変えた」という言葉が残されていますが、その一発の銃声がしたのが、1775 年 4 月 19 日、レキシントンです。私たちはミニットマン国立歴史公園にまず立ち寄り、銃声の鳴ったその日を再現したジオラマを見ました。

アメリカへの入植から 150 年ほど経過して、イギリスは課税を開始しました。アメリカ入植者はイギリスへの不満が高まり、独立を願い始めました。

イギリス軍はコンコードに武器庫があるとの情報でボストンから進軍してきました。入植者たちは民兵を募り、連絡を密にとって、待ち伏せしていました。レキシントンで、民兵の一発の発砲に対し、イギリス軍は一斉射撃で応酬し、戦闘が開始しました。英軍はコンコードまで進軍し、コンコード川にかかるノースブリッジで敗色が濃くなり、退却。しかし、ここから独立戦争が始まったのです。

武装した正規のイギリス軍に対して、訓練も受けていない一般の農民が民兵となり、銃を取りました。俄仕立てで、帰宅しては作業もしたりの彼らはミニットマンと呼ばれました。奴隷として連行されて来たアフリカ人も、勝利した暁には解放するとの約束で志願しています。戦争は何と言っても兵站が充実し、情報が早くなければなりません。広大な大地を把握し、武器も用意し、家族一体となって準備していた入植者側は備えも動きも気迫も有利。祖国となった土地での生活を守る思いは強いものです。大西洋を越えて来るほうは不利です。

1776 年、13 州が一致し、独立宣言を出しました。戦争はフランスの援助により、1783 年に終結し、植民地から脱し、合衆国となりました。エマーソンの「雷は 1 インチの地に落ちるが、その光は地平線に満ちる。1875 年 4 月 19 日」と刻まれた石板がノースブリッジのそばの道に敷かれていました。この詩の言葉が「一発の銃声が世界を変えた」ということなのでしょう。

独立戦争から 85 年後に、南北戦争（1861-1865）が始まります。その最中、1862 年の 3 月に、ジョセフ・ヒコはワシントンでリンカーン大統領に会い、通訳官の任命を受けたことを感謝し、握手しています。リンカーン大統領の印象を「長身痩躯、手は大きく、黒みがかった髪には銀髪がまじり、わずかばかりのほおひげをたくわえていた…彼は黒いフロック・コートを着ていた。極めて真面目で親切な人間で、接する人々の誰にも愛され…」と記しています。ヒコはアメリカで、奴隷制度反対の動きを知り、自由や人権の大切さを学んだに違いありません。また、アメリカの民主主義や、国の指導者の資質を目の当たりにしたでしょう。

今は、かつての激戦地は緑あふれる静かな場所となっていました。橋は昔の姿を留めています。